

平成 20 年度

病害虫発生予察特殊報 第 3 号

平成 21 年 1 月 30 日

茨城県病害虫防除所

Tel : 029-227-2445

キュウリ黄化えそ病の発生について

病 害 虫 名 : キュウリ黄化えそ病

病原ウイルス : メロン黄化えそウイルス *Melon yellow spot virus* (MYSV)

発 生 作 物 : キュウリ

1. 発生確認の経過及び県外での状況

(1) 平成 20 年 12 月, 県北地域のキュウリほ場で, 葉に退緑, えそ症状を伴う小斑点やモザイク症状を生じる株が発生した。

被害株の症状からウイルスによる病害が疑われたため, 茨城県農業総合センター園芸研究所において ELISA 法により検定したところ, *Melon yellow spot virus* (MYSV) によるキュウリ黄化えそ病と確認された。

(2) 本病は平成 8 年に高知県で初めて発生し, その後, 20 県で発生が確認され, 関東地方では栃木県, 群馬県, 埼玉県, 神奈川県で発生が確認されている。

2. 病徴

病徴は主に葉に見られ, はじめ葉脈間に退緑症状を生じ, その後, モザイク症状(写真 1)や退緑斑点(写真 2), えそ斑点, 黄化等の症状を示し, 一見すると要素欠乏による症状と類似している。果実には症状が現れないが, まれに表面にモザイク斑を生じる場合がある。発病が著しい株では生育が不良となり枯死する。

3. 伝搬方法等

本ウイルスはミナミキイロアザミウマにより媒介される。ミナミキイロアザミウマは, 幼虫時にウイルスに感染した植物を吸汁することでウイルスを獲得し, 死ぬまで伝搬能力を保持するが, 経卵伝染はしない。なお, ミナミキイロアザミウマ以外のアザミウマによる媒介については不明である。種子伝染, 土壌伝染はせず, 汁液による伝染力も弱いことから, 管理作業により伝染する可能性は低い。他県ではキュウリ以外に, メロンやスイカ等での感染も報告されている。

4. 防除対策

(1) 施設栽培においては, ハウス開口部に防虫ネットを設置し, UVカットフィルムや光反射マルチも利用して, アザミウマ類のハウス内への侵入を防止する。

(2) 育苗時に感染すると被害が大きくなるので育苗時の防除を徹底し, 症状が疑われる株は直ちに処分する。

(3) 発病株は伝染源となるので速やかに抜き取り, ビニール袋等に入れて密封しておき, 完全に枯れてから処分する。なお, 芽かき処理等で取り除いた茎や葉等にもアザミウマ類が付着している場合が多いので, 同様に処理する。

(4) 雑草はアザミウマ類の生息場所となるので, ほ場内外の除草を徹底する。

(5) ほ場内に発生するアザミウマ類の防除を徹底する。なお薬剤散布にあたっては, 薬剤抵抗性アザミウマ類の出現を防ぐため, 系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う(表 1)。なお, 青色粘着板を利用して発生動向を把握し, 適期に防除を行うと効果的である。

(6)施設栽培においては栽培終了時に、株元を切断する等の断根処理と除草を行った後、ハウスを密閉して1~2週間程度蒸し込み処理を行い、アザミウマ類を確実に死滅させる。



写真1 葉の退緑，モザイク症状



写真2 葉の小斑点退緑症状

表1 キュウリのミナミキイロアザミウマに登録のある主な薬剤（平成21年1月1日現在）

薬剤名	有効成分名	使用量または希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数（回）	系統
オンコル粒剤5	ベンフラカルブ	0.5~1g/株 (株元散布)	育苗期後半 又は定植時	1	カーバメート系
ベストガード粒剤	ニテンピラム	1~2g/株(植穴 処理土壌混和)	定植時	1	ネオニコチノイド系
アルバリン/スタークル 顆粒水溶剤	ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2	
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	2,000~4,000 倍	収穫前日まで	4	I GR
スピノエース顆粒水和剤	スピノサド	5,000倍	収穫前日まで	2	天然物由来
アフーム乳剤	エマメクチン 安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2	その他
コテツフロアブル	クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2	その他

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載された使用方法、注意事項や有効成分の使用回数等を確認のうえ使用して下さい。

周辺作物等へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意して散布して下さい。